

■AA・A 評価のイチョウの巨木

写真 I-001 世界一のイチョウ きたかねがさわ 北金ヶ沢のイチョウ

世界一のイチョウである北金ヶ沢のイチョウは、日本の樹木の中でも最大規模である。大木のたとえに、一本の木で森を形成すると言われるが、北金ヶ沢のイチョウは正に森である。あまりに巨大で、最初樹下に立った時、全体の樹形がすぐに理解できなかった程複雑であった。これ程の巨木が、世界一であり、又日本一でもあると認識されたのは極めて最近の事である。1982年発行された「石川県の巨樹」(里見信生編纂)の書では、イチョウの日本一は岩手県の長泉寺の大イチョウと記載され、北金ヶ沢のイチョウは幹周は何と12.9mで二位にランクされている。どうしてこのような事態になったのかは未だに謎である。里見氏は樹木の専門家であり、専門家も著書発刊時、このイチョウの存在を認識していなかったようだ。

1999年に発行された「巨樹・巨木」渡辺典博著で初めて幹周20mと紹介される。キャプションで「環境庁の調査ではもれているが、本書のランキングでは一位」との記載があることから、ようやく日本一のイチョウの認識ができたようだ。

立地は日本海に面した港の傍で、背後は切立った断崖。冬でも意外に雪があまり積もらず、海水の影響で温暖である。この事は紅葉の真っ盛りが、青森では稀な12月に入ってからということからも理解できる。背後に断崖がある事から風雨から守られ、水脈も豊富にあるのだろう。そのため、主幹から生えたひこ生えが次々と周囲で巨大化して融合、森のような樹形が形成されたと推察されるのである。そして、冒頭でも触れたように、このイチョウは中国渡来ではなく、日本の在来種ではないかという疑問が出ている。専門家の調査を待ちたい。



雪の降る朝の全景。2008.11.19

離れて見る全景は、球形をして、穏やかな樹形であるが、樹下に立つと、見る方向によって随分樹形が変化する。祈祷する正面の樹下に立つと、まるで荒々しいジャングルの中に入り込んだようで、昼なお暗く、不気味な雰囲気が漂う。右に進んで、東側に立つと、さらに巨大な気根等が至る所から出て、グロテスクな雰囲気が増幅される。反対側の西側に回ると、雰囲気は一変し、林立するイチョウ林から垂れるように出る無数の枝や葉で、黄色に彩られた巨体は鮮やかであった。

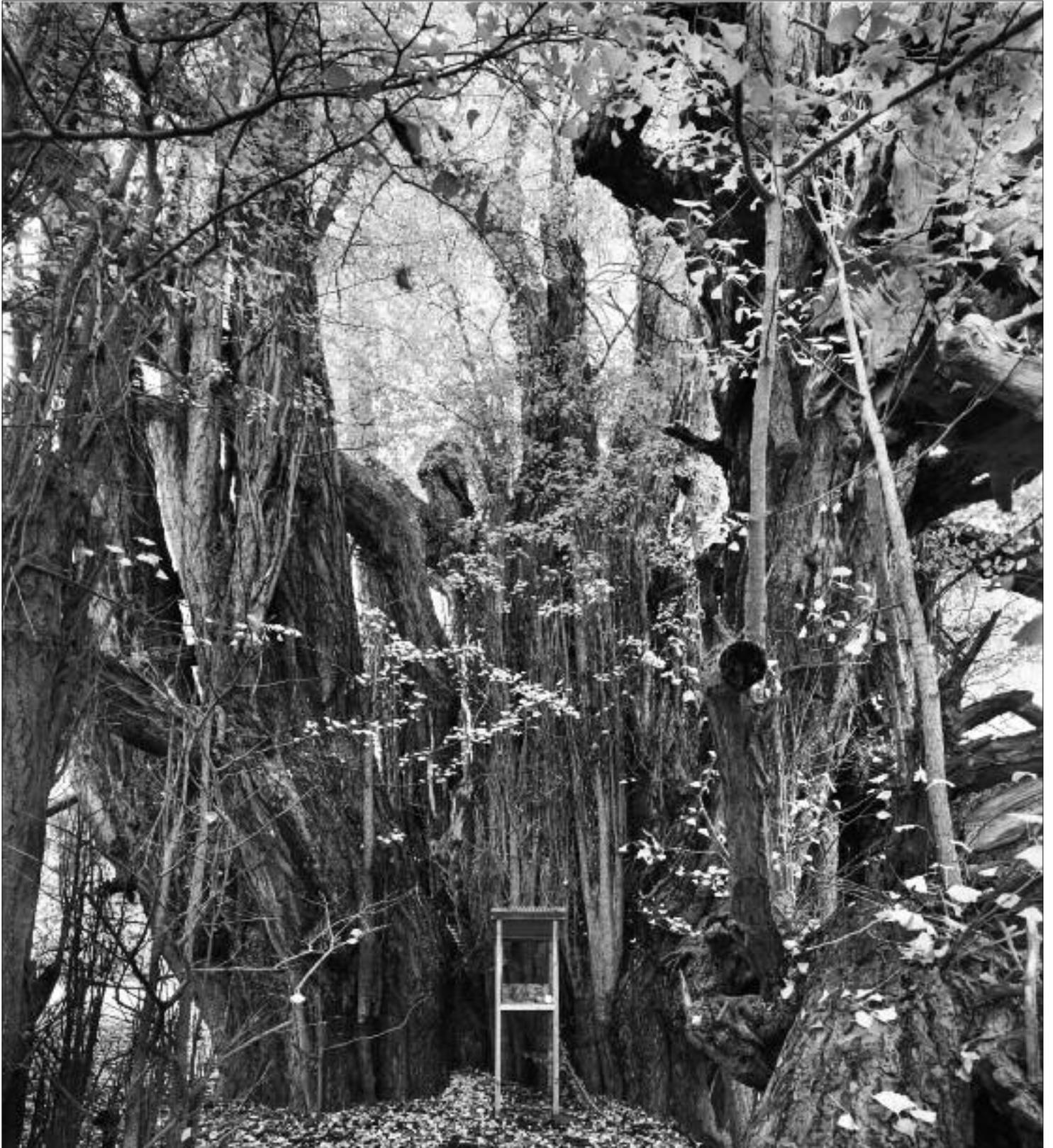
世界一であり、日本最大の巨木である本樹は、AA 評価である事の論を待たない。



北金ヶ沢のイチヨウ・東側の樹形。巨大な側幹から垂れる
無数の気根、水平に出る巨大な幹等、迫力に圧倒される。



北金ヶ沢のイチョウ・西側の樹形。東側と対照的に、葉が
茂り、紅葉の季節は実に華麗である。



北金ヶ沢のイチョウ・正面の樹形。中央の主幹は衰退し、左右に立上がる巨大な側幹が実に荒々しく聳える。すなわち、最初中央の主幹が成長し、衰退すると側幹が周辺に伸び、一体化して成長していった様子が伺える。



乳保神社のイチョウ全景



写真 I-002

にゅうぼ

乳保神社のイチョウ

神社境内の柵に囲まれた狭い空間に閉じ込められ、とても全国二位のイチョウとは思えない程の環境にある。ひこばえが主幹から離れて立上がり、幹周の測定を難しくしているが、これは含めない。北金ヶ沢のイチョウと同様に、主幹周囲に側幹が融合するように巨大化していった樹形である。

樹形に難があるものの、巨大なためA評価とした。



写真 I-003

ふくじょうじ

福成寺のイチョウ

熊本の標高750mの山寺の境内にあり、最近まで全国三位のイチョウとの認識すらなかった。これも、主幹を囲むひこばえが次々と融合していった樹形だ。環境省の測定値とM式が見事に一致した珍しい大イチョウ。樹形に難があるものの、巨大であるためA評価とした。



写真 I-004

ねぎし
根岸のイチョウ

ひこばえが次々と主幹脇から芽生え、巨大化し癒着した樹形。

樹形に難があるもの、巨大であるためA評価とした。



▲根岸のイチョウ(背後からの樹形)



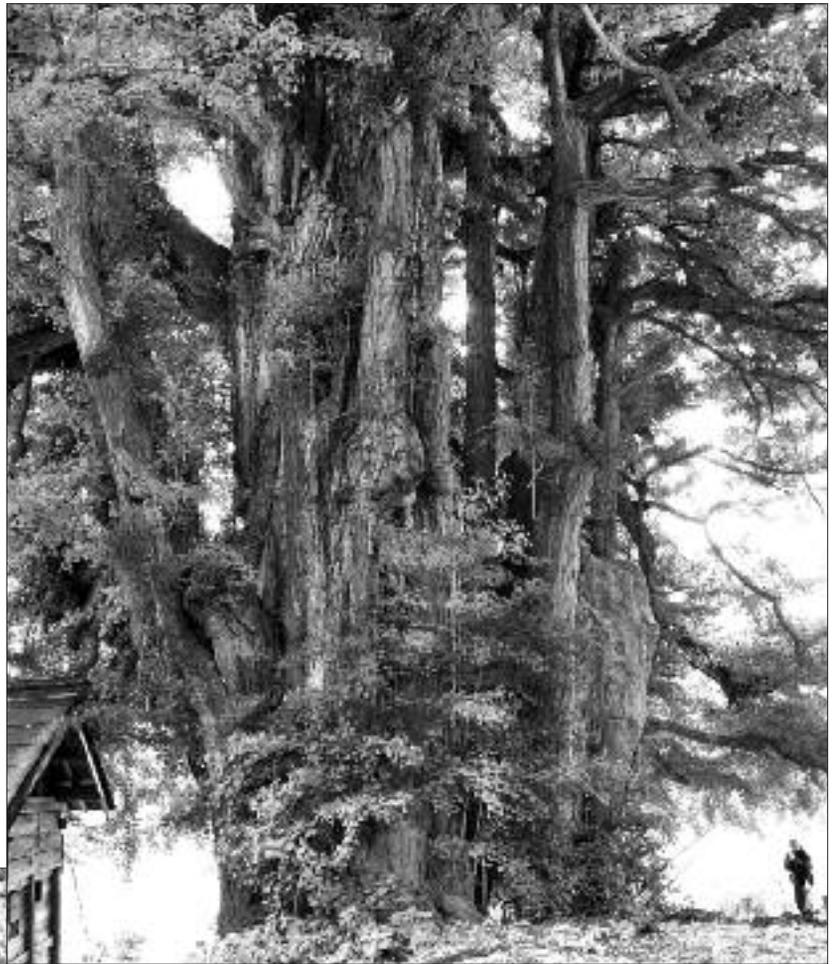
写真 I-005

ちょうせんじ
長泉寺のイチョウ

主幹が破損したが、ひこばえが無数に出て、樹形が変らぬ程に回復した。国指定時の主幹が破損しているものの、巨大感は保たれているので、A評価とした。



神戸のイチョウ(前面からの樹形)



▲写真 I-006

こうど
神戸のイチョウ

これまで幹周 13m とされていたが、14.4m であることが判明し、一躍 6 位に踊り出た。接近して癒着した二本の主幹から出るひこばえが次々と横側に広がって巨大化している。巨大感が素晴らしいので A 評価とした。



写真 I-007

ほうりょう
法量のイチョウ

日本で最初に国指定天然記念物に指定されたイチョウの一本。ひこばえが巨大化して融合したもの。A 評価に論を待たない素晴らしいイチョウである。

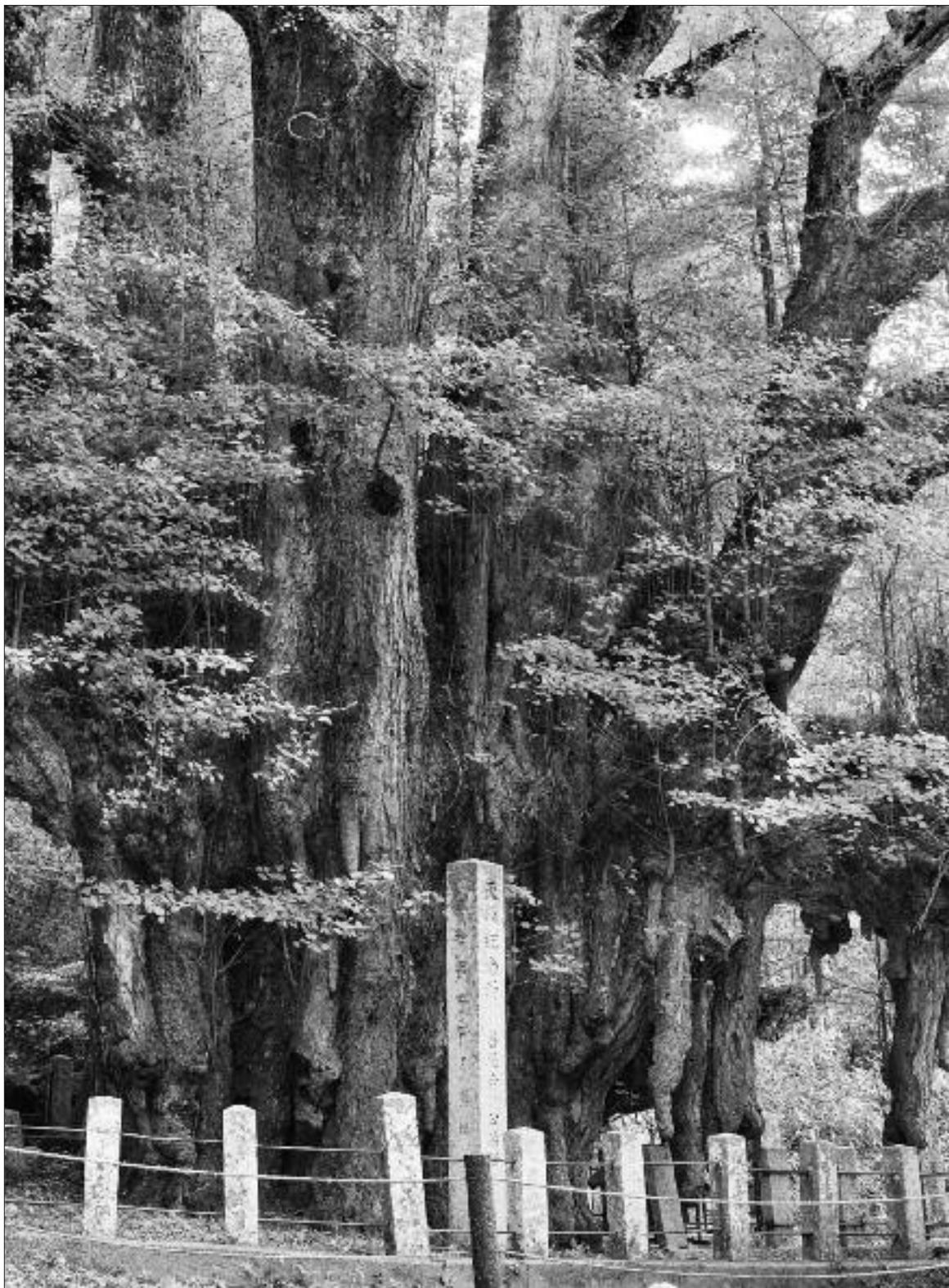


写真 I-008

ぼだいじ
菩提寺のイチョウ

地上2~6mで多数に分岐する樹形。分岐部が最も太く、幹周以上の迫力がある。又、水平に伸びる巨大な幹や、大きな気根はまれに見るイチョウの怪樹。A評価の論を待たない見事なイチョウである。



写真 I-009
おおいちょう
大銀南木

ど迫力のイチョウ、まさに怪樹である。全体が爆発しているような印象がある。イチョウの生命力の強さを見た思いがする。

臨済宗の名僧・法身国師が75才の折、この地に庵を結び、このイチョウを植えたと伝えられる。西暦1263年の記載が残り、樹齢約750年。樹齢の根拠が示された珍しいイチョウでもある。

北金ヶ沢のイチョウに次ぐ迫力と、歴史的にも有意義なイチョウで、A評価の論を待たない。



写真 I-010

日本一の雌株イチョウ

じょうにちじ 上日寺のイチョウ

上日寺のイチョウは珍しい雌株の巨木で、晩秋にぎんなんが見事な程なる。上日寺が創建された673年に植樹されたと伝えられる事から、樹齢1340年以上ということになる。雌株だけでは結実しないため、同時に雄株も植えられたと考えられるが、現在それは残されていない。全国の雌株イチョウを調査した結果、日本一の雌株イチョウであることが判明した。(歴史的記述が正確ならば、中国でイチョウが発見される以前に植えられた事になる。しかし、幹周から算出される樹齢は約720年。難破船から銀杏が発見された時代と一致する事や、石川県七尾の山中に天然のイチョウが存在する事実を考えると、中国渡来説、在来種説かは微妙な存在である。)

上日寺のイチョウは地上5m程までほぼ単幹樹で、その上に、太い主幹を取巻くように大小9本の幹が立上がる。気根は少なく、正面の主幹から長さ1m程のものが数本見られるのみ。現在、主幹の先端が15m程で切断されている。主幹が健全な頃は、樹高40mもある巨大なイチョウであったという。

雌株イチョウでは日本一である事からA評価の論を待たない。



写真 I-011▶

さるかわ 日本第二位雌株イチョウ 去川のイチョウ

1993年の台風で大枝が折れて樹形が大きく変わったが、気根もなく、雌株の単幹イチョウとして上日寺に次ぐ。最近、樹勢が弱ってきたか、根元近くからひこばえが多数出ている。(写真・Web画像)



▲上日寺のイチョウ(境内側より)



▲写真 I-012

ほうりゅうじ
法龍寺のイチョウ

境内の入口にカヤの巨木があり、イチョウは一番奥。西暦1311年に覚如上人によって植えられたという記述が残されている。樹齢704年。(2015年現在)

植えられた年号が判っている貴重な一本である事と、巨大感は見事で、A評価とした。

写真 I-013

みやた
宮田のイチョウ(北株)

古い宗教遺跡と思われる場所に、二株の大イチョウがある珍しい場所。北株は1.5mで二分岐する樹形で、南株は6mで9分岐する。

分岐樹形であるが、双方単幹樹であり、巨大感は素晴らしく、A評価とした。



写真 I-014

葛飾八幡宮の千本イチョウ

無数のひこばえによる叢生樹。これ程多くの幹が立上がるのは珍しく、カツラの樹形を連想させる千本カツラならぬ、千本イチョウの代表格であることから、A評価とした。

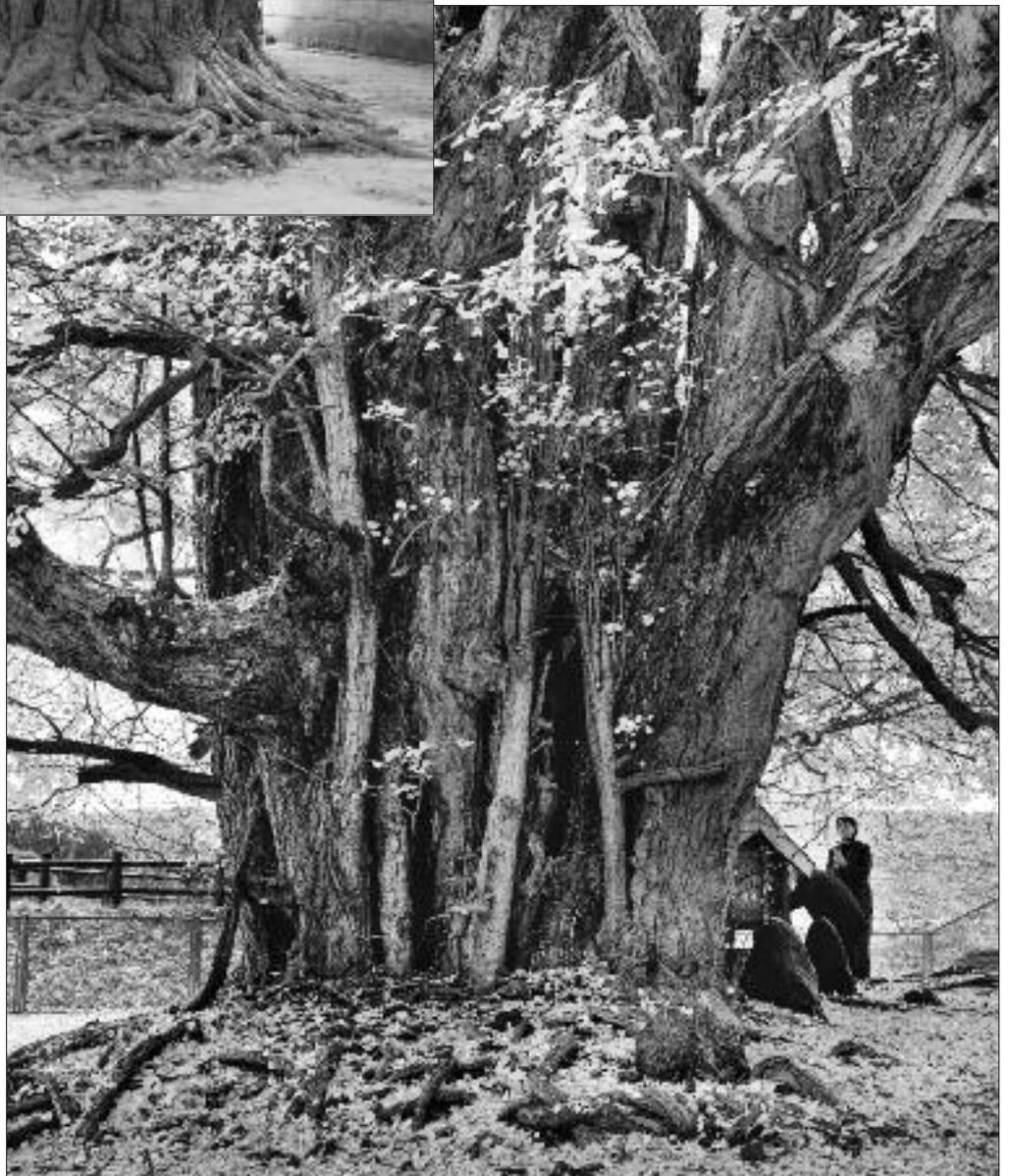


写真 I-015

折曽のイチョウ

関の甕杉のすぐ傍、北金ケ沢のイチョウの近くにあり、国道より一段下がる。地上3mで大小8分岐。樹下の祠の神は地元の人々の信仰を集めている。

日本一の北金ケ沢のイチョウがあまりに巨大であるため、本樹の評価がなされていないが、A評価として遜色ない巨大なイチョウである。





▲写真 I-016

日本一の気根イチョウ

じょうりゅうじ

常瀧寺の大イチョウ

寺の参道右手から林道を山に登る事 20 分、旧常瀧寺遺跡に立つ。分岐幹の下から何本もの巨大な気根が垂れる様は壮観である。

気根イチョウとしては日本一である事から A 評価とした。

写真 I-018▶

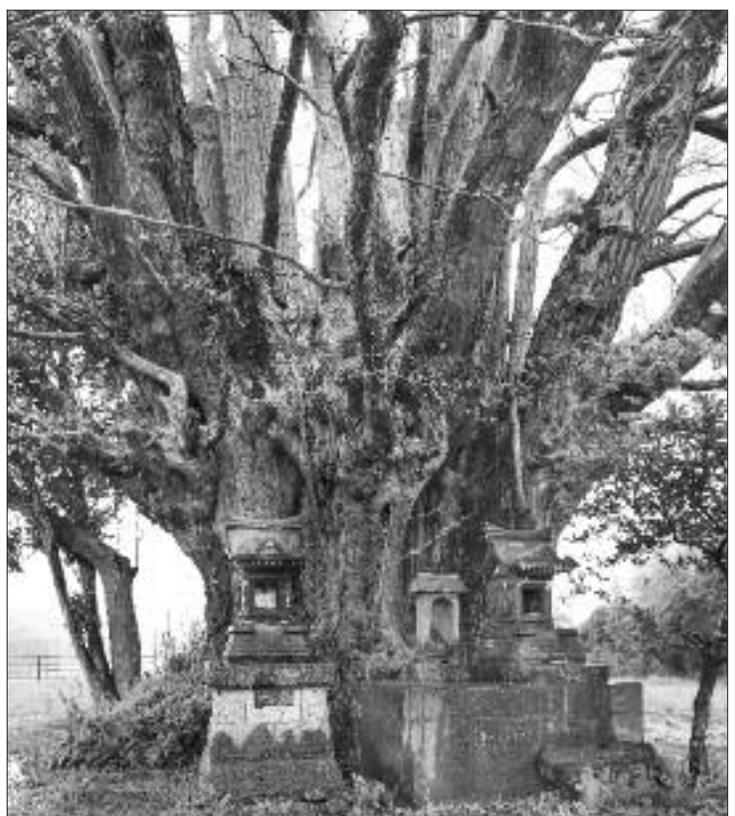
日本一のオハツキイチョウ

ほんごう

本郷のイチョウ

オハツキイチョウ(お葉付き銀杏)としては、日本一のイチョウで、A 評価とした。発生確立は低い、雌株である。

(お葉付き写真・Web 画像)



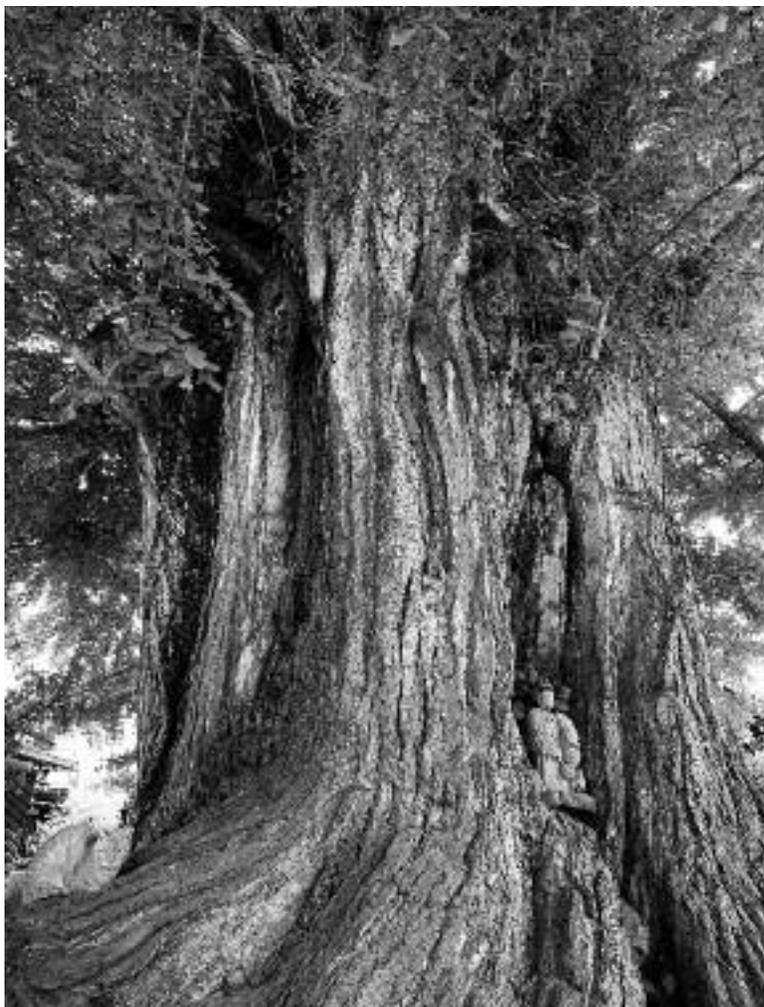


写真 I-019
ひだこくぶんじ
 飛騨国分寺の大イチョウ

主幹に仏像が安置されている珍しい大イチョウ。初雪が降ると一斉に落葉する。

イチョウの巨木のほとんどは分岐幹融合木であるが、本樹は稀に見る単幹樹で、樹高も高く見事である事からA評価とした。



◀山門の背景に巨大な樹形が見える。



写真 I-017
 日本一見事な気根イチョウ
にがたけ
 苦竹のイチョウ

地元では「乳イチョウ」とか「姥イチョウ」と呼ばれ、崇敬を集めてきた。樹下には「銀杏姥神」が祀られている。雌株で毎年多くの実がなり、それを集めるためか、樹下にはシートが敷かれてある。一帯は宮城野原と呼ばれ、野守を務めていた永野家の敷地内にあり、拝観には許可が必要。

無数に下がる気根の見事さでは日本一で、A評価とした。

■B 評価のイチョウの巨木



写真 I-020

毛佐^{けさ}観音堂のイチョウ

巨木DBでは幹周14.2m。何本もの分岐幹を合計したものか。主幹のみの幹周は8.8m。測定方法によって、過大評価されたイチョウ。

(写真・赤司裕宣)



写真 I-021

大久保^{おおくぼ}の乳イチョウ^{ちち}

上下にある道路の法面に立つ。谷側に張出した幹の付根に30本程の気根が下がる奇樹だ。現地記載の幹周13mは、張出した幹を含めて測定したものか。



写真 I-022

銀杏ノ木窪^{いちようのきくぼ}の大イチョウ

地元で信仰されている大イチョウで、近年までほとんど存在も知られていなかった。これも、ひこぼえが次々と融合しながら巨木に成長したもの。お椀を伏せたような美しい樹形で、紅葉期は実に見事である。側幹を含めて測定し、表記は分岐と記載する。



◀写真 I-023

たるみず
滴水のイチョウ

大小6本の幹からなり、太い2本が癒着する樹形。このような主幹と側幹で成り立っている樹形の場合、「株周」と表記する事によって、幹が詰まっている単幹樹と区別できる。しかし、測定部まで融合が進んでいると、区別するにふさわしい表記を見いだせていないため、あらゆる樹形を表現する事は至難である。

▼写真 I-024

ぎりはた ちちいちょう
切畑の乳銀杏

安産の霊木として信仰を集めている。撮影・1983年



かわらまち
▼写真 I-025 川原町のイチョウ

ひこばえの融合木であるが故、ほとんど認知されていないイチョウである。しかし、巨大感はある。深浦町やその周辺に銀杏の巨木が密集しているのは、北金ヶ沢のイチョウのクローンの可能性がある。(写真・石田徹)

